

# 恋するブツト

第27回

藤村かおり

92年より、小説、エッセイ、児童書等、幅広く執筆活動中。  
猫2匹と暮らしペットに関する作品も多い。週刊朝日などに  
もペット記事を寄稿。著書に「明日(ヘアカセス) (金の星社)」、  
「本はこころのともだち」(共著・メテアパル)など。  
秋葉馬が始まり、リベンジに燃えています。



## もしも飼い主が倒れたら

40代の知人が病気で亡くなったのは、今年の春のことだった。彼女は、今年のことだった。

彼女はマンションで犬1匹、猫7匹と同居していた。突然この世から去り、動物が残されてしまった。犬は妹がひきとり、猫2匹は貰い手が見つかったが、5匹の猫が今も「主なマンション」で「猫だけで」暮らしている。妹が猫のために家賃を払い、母親がフードを与えに通っているというのだが……。

私も一人暮らしで猫を飼い、喘息持ちでよく救急病院に入るので、人ごととは思えなかった。周囲に頼る者がいなくなったらペットたちはどうなるだろう。私だってもし倒れたら、70代の親に猫を託せない

(実家でも複数飼っている)ので、里親探しが必要だ。

50代の猫友達は、私よりも重い喘息持ちだが、いざという時のために「ペット貯金」をし、「遺言書」も書いている。

「4、50代でもいつ倒れるかわからない。高齢者であればもっとその可能性が高い。ペットと暮らす以上、飼い主は『先のこと』と『もしもの時』を考えなければいけないわよね」と彼女。

たしかにそれは飼い主の責任であり、義務だ。

一人暮らしや高齢者はベツトと暮らすことで多くの癒しをもらうが、先に倒れたら、動物たちが路頭に迷う。

何があるかわからない時代、そして高齢者が増え続ける日本では、もっともっと『もしもの時』について語られるべきだと思う。

こうした問題に、すでに真剣にとりくんでいるボランティア団体もある。静岡県にある「日本ドッグホーム協会」は、2001年より、60歳以上の高齢者の飼うペットの救済をおこなっている。

無償で引き取り、世話をしているのだ。

犬の雑誌でその存在を知ったのだが、代表の白井睦子さんの写真を見て、直接訪ねてみたいと思った。写っていた犬たちの姿ももちろんだが、白井さんの純粋な瞳に、とても惹かれたのだ……。

\*

私が日本ドッグホームを訪ねたとき、白井さんは4台の洗濯機を回して、洗濯していた。

現在、ホームには犬70頭、猫90頭がいるという。その動物たちのお世話に、たくさん動物やタオルを使うという。「洗って干して、散歩して、あつという間に一日が終わってしまふ」と、白井さんは汗をぬぐった。

ホーム内を見せてもらうと、1階にはミニチュアダックスや、チワワやコーギー、2階には、レトリバーやシベリアンハスキーなど大型犬がいる。「権兵衛・オス・伊東市」

と書かれたサークル前で、私は立ち止まった。灰色がかった秋田犬。ちよつととほけた、ちよつと悲しげな表情。私は権兵衛から目が離せなくなり、白井さんに訪ねた。

「この子、いつからここにいますか？」

「2年前からです」

「こんなに大きな犬を、高齢になつて飼う方がいるんですか？」

「多いですよ。しかも高齢者が飼う場合、犬が社会化されていないから、しつけが大変ですね」

白井さんによれば、自分はまだ元気だし散歩も問題ない、と大型犬を迎えた後で悩むケースや、こんなに



1 代表の白井睦子さんと、協会を  
たちあげるきっかけにもなったチ  
ェリー。2 散歩は1日に2度。人  
気の小型犬も協会にはたくさんい  
る。3 秋田犬の権兵衛。なにを訴  
えているの？ 4 犬たちは清潔な  
ケージ内で1匹ずつ過ごす。  
5 セントバーナードのポップ。1キ  
ロの肉もべろり。6 協会内で寿命  
を全うする犬も多い、元飼い主が  
希望した場合には分骨を。



大きく育つと思わなかった、と後になって手放すケースがあるという。「高齢者が病気などで倒れ、犬をひきとってほしいという声は年々高まっています。全国から集りますよ」もちろん、つらい思いでやむを得ず手放す人も多い。「ペットのゆく先を案じるばかりに、自分自身の入院をためらう方もいます。そうした高齢者を救いたい」それこそが、白井さんの願いだという。

同協会は会員の年会費、寄付で維持されているが、実際には白井一家の財産の持ち出しもある。高齢者が飼っていた犬は

このホームで残りの犬生を過ごすという。預かった犬の写真はカレンダーにして、元の飼い主に送り、協会で犬が亡くなった時には希望者に分骨もしている。若い犬に関しては里親を探すこともあり、犬の「貸し出し」システムも行っている。この場合、所有者はあくまでも協会だ。

……飼い主と別れるのはつらい、でもこのホームにいる犬は幸福。散歩にいき、サークル内も清潔。順番にトリミングしてもらえる。じつは白井さんは以前、ここで犬の美容室を開いていたのだ。「美容室にいらしていた高齢のお客様からペットシッターを頼まれていたのですが、ある時、言われたんです」「もしも自分になにかあったら、うちの犬たちを引き取ってもらえませんか？」実際に、その犬たちをひき

とったことが、日本ドッグホーム協会の始まりだった。そんな経緯のために、協会の本部は住宅街にある。「できれば山間部で気兼ねなく犬たちを世話したいと思っ

て探していたのですが、愛知県豊田市の7千坪の土地を「犬のために」と譲り受け、準備中なんです」と白井さんが生き生きと話

す。「犬が増えるなか、個人では限界がある。これからは後継者を育て、支部も増やしていきたいんです」白井さんのように「思う」人は多いだろう、だが実際に「活動」することは容易ではない。だからこそ応援したい。何よりもそこには、人と動物への真の優しさがあつたから……。

余談だが、「週刊朝日」でこの活動を紹介したところ、犬を引き取ってほしいという電話が数多く協会にあり、2週間で10匹近い犬を引き取ったという。読者から協会に多額の寄付も寄せられた。私に出来るのは書くことだけだけれど、これからも、心に響いた真実を伝えたい、と思っている。